

文法化された「～やる」と項構造 全体は部分の総和にあらず

山 本 和 之

1. 目的

本稿は、(1)に見られるような補助動詞としての「(～して) やる」(以下「～やる」とする)が、本動詞の「やる」と同じようにゴール(goal)項を保持しているという Shibatani(1994) (=柴谷) に対して、「～やる」は文法化の段階でゴール項を喪失し、もとのゴール項に対応するものは意味構造の中だけに存在するという主張を行う。¹ その中で、複合動詞が全体としてその構成要素にない文法機能を獲得する可能性があることを指摘する。

(1) 花子は子供に柿を送ってやった。

(2)に見られるような本動詞としての「やる」がゴール(山本ではリシピアント(recipient))項を持つ3項述語であることには異存はない。

(2) 花子は金魚に餌をやった。

(2)の「やる」から(1)の「～やる」への変化は、本稿では次の(3)から(4)への変化として捉えている。²

(3) YARU: X CAUSE Y TO HAVE Z ⇒
 | | |
 < ag rec th >

(4) -YARU: X CAUSE Z FOR Y
 | | |
 < ag event ∅ >

すなわち、(3)の[Z]がイベント(event)のとき、(3)の[Y TO HAVE]が[FOR Y]に転化し、[Y]が非項化されるわけである。つまり(4)の

「～やる」にはそれ自体のリシピアント項はないのであり、もしリシピアント項があれば、それはイヴェント[Z]の中の動詞が取る項ということになる。(1)の「(送って)やる」の項構造を具体的に示すと(5)となる。³ (5)の内側の ag と外側の ag は融合されるので、「送ってやる」の項として格表示(形態格)を受けるのは(6)のように3項となる。⁴

(5) 'YARU<ag OKURU<ag rec th>>'

(6) 'OKUTTE-YARU<ag rec th>'

柴谷の設定した「～やる」のゴール項は、特別の限られた場合を除いて、特定の格や特定の文法機能にリンクされて表出されるということがない。本稿はその特別の場合も、「～やる」にゴール項を設定しない分析が可能であり、その方が簡明さの点ですぐれていることを示す。もしこのゴール項がすべての場合に抑止され、特定の格や文法機能に写像(map)されることがなく、その指示物(以下Rとする)も文のいろんなところに現れるのであったなら、項としては存在しない可能性が高いといえる。山本で柴谷のゴール項に対応しているのは、(4)の中の[Y]である。[Y]は項にリンクされておらず、従って特定の文法機能に写像されることもない。[Y]が誰を指すかは、意味の流れの中で決まってくる。意味構造は柴谷でも設定され、この構文の解釈を決める際に利用されているわけであるから、意味構造の[Z]に言及したからといって山本の説明が特に複雑になるわけではない。

柴谷では、(1)の構文に対しても、(2)の構文と同じ GIVE-schema による解釈規則が適用される。しかし「～やる」にもゴール項を設定したために、「～やる」構文の解釈自体が著しく複雑になっている。そこでは、「～やる」のゴールが、自分の項仲間であるシーム(theme)をさしおいて、主動詞の方のシームとHAVE関係に入るという不倫を許している。不倫が生じるということは、二つの項構造間の垣根がなくなり、「～やる」と先行する動詞とが統合されているということではないだろうか。本稿では、柴谷で不倫が生じているような場合は両者が統合化されたものとして考えており、そう考えるべき証拠を提示している。山本では不倫は生じな

い。

2. 用例の考察と分析

以下の(7)の「やる」と、(8)から(11)までの「～やる」を比べれば、「～やる」に意味と構文の両面で転移が起きていることは明らかである。文法化された「～やる」は、ある物を人に与えるという意味から、人のためにある行為をする(=ある行為を人に与える)という意味に転じており、それに伴って、非二重目的語構文(非「に・を」構文)へと移行している。⁵ 「に」名詞句が現れていても、あとで考察するように、それは「～やる」の項ではない。

(7) 猫に餌をやった。

(8) 次郎に飲み物を持って行ってやった。

(9) 次郎の荷物を持ってやった(のてくたびれた)。

(10) (退屈そうだったので) 次郎と遊んでやった。

(11) 本屋なんかに行ってやるもんか。

文法化された「～やる」の取る行為は、上例のように他の人にとって好意的行為である場合もあれば、(12)のように、非好意的行為の場合もありうる。(13)ではそのどちらにもなりうる。

(12) 腹が立ったので、次郎をぶん殴ってやった。

(13) (ばれないように／困らせてやろうと) 手紙を隠してやった。

取った行為が目指す相手の利益にも不利益にもなるのは、原型の(3)において、[Z]の内容次第で取った行為が利益にも不利益にもなるのと同様である。(14)は(7)とは反対に猫にとっては不利益な行為である。

(14) 猫に毒をやった。

下の(15)のような例では、自分のために取る行為であって、話者の積極的行為ないしは強い意志を表す。

(15) 今度は絶対入賞してやる。

これまでの例から分かるように、誰のためにその行為を取るか、その対象となる人は表出されなくてもよく、また表出される場合もリンクされる

文法機能が指定されているわけではない。(8)では利益を受ける人は間接目的語の「次郎に」である。(9)では、次郎が荷物をもっているのであれば、POSS のところに恩恵をうける人が現れており、もしほかの人が次郎の荷物を持っているのであれば、恩恵をうける人はこの文の中には現れていない。⁶ (10)では、誰のためかは OBL (「次郎と」) のところに出ている。(11)では誰のために行くかは文中には出て来てない。要するに、「～やる」の意味が持つ [FOR Y] の部分は特定の文法機能や特定の格表示とリンクされてはならず、それが誰を指しているかは、文脈で決まってくる。

それでは、この [FOR Y] の部分は特定の項とリンクされているであろうか。つまり「～やる」の項構造の中に特定の項として現れるであろうか。もし特定の項として現れるのであれば、その項は抑止されて特定の文法機能に写像されないという特殊な性格をもつことになる。⁷ 他方、もし特定の項として現れないのであったら、特定の格や文法機能と結びつかないのは当然の帰結ということになる。柴谷は前者の主張を行っており、「～やる」は ag, go, th を取る 3 項述語である (但し th の中身はイベント)。これに対して本稿は、「～やる」は ag と event を項としてとる 2 項述語であると主張する。但し、「～やる」とそれが取る動詞が協働した結果、複合動詞全体としてはリシピアント項を取る場合があると考える。⁸ まず、柴谷が「～やる」がゴール項を取る証拠のひとつとしてあげている (14) のような例を見てみよう。

(14) 太郎が花子に本を買ってやった。

一体(14)における「花子に」はどの述語が認可している要素であろうか。柴谷は、「買う」はゴール項を取らないのであるから (「⁹太郎は花子に本を買った。」、「～やる」がゴール項「花子に」を取っているという。確かに本動詞の「やる」が「に」格名詞句 (ゴール項) を取るのであるから、「買う」が「花子に」を取れないのであったら、文法化された「～やる」が取っていると考えるもおかしくないように思える。しかし、これにはもう一つの考え方が可能である。つまり、「買う」も「～やる」も「に」格

名詞句（ゴール項）を取らないが、「買ってやる」全体としては「に」格名詞句（間接目的語）が取れるとする分析である。前者が要素還元的であるのに対して、こちらは、〈全体は部分の総和を超える〉という、全体としての統一性（働き）を重要視した考え方である。そのように考えるべき例を複合動詞からあげておく。複合動詞「持って行く」は、「持つ」も「行く」も(15)、(16)が示すように間接目的語としての「に」格名詞句は取れないのに、全体としては(17)のように「に」格名詞句が取れるのである。

(15) *次郎に飲み物を持った。

(16) *次郎に飲み物を行った。

(17) 次郎に飲み物を持って行った。

(17)の「次郎に」を「行く」の取る斜格(OBL)と考えることができないことは、(18)がアウトであることから明らかである。

(18) *太郎は次郎に行った。

「持って行く」が間節目的語を取れるのは、「行く」が着点のゴールを取れる（「学校に／へ行く」）ことに関係があるのは事実であるが、「持つ」と複合して初めてそのゴールがリシピアントとして働くことになるのである。「買って来る」も同様で、(19)、(20)が示すように、個々の動詞が取れない文法機能を全体では取ることができる。「持って行く」も「買って来る」も、全体としては(3)に示した「やる」の意味構造と同じ意味構造をもっているからである。⁹

(19) 次郎にお弁当を買って来てちょうだい。

(20) a. ?次郎にお弁当を買ってちょうだい。

b. *次郎にお弁当を来てちょうだい。

それでは(14)の「～やる」の例はどのように考えるべきであろうか。私はこれも上例と同じように考えたい。確かに(21)、(22)のような、先行する動詞が「に」格名詞句を取れない場合を考えると、「～やる」の方が「に」格名詞句を下位範疇化しているように見える。

(21) 次郎にケーキを焼いてやった／選んでやった／買ってやった。

(22) *次郎にケーキを焼いた／選んだ／買った。

しかし、(17)の例で見たように、全体はその要素に還元できない（全体はその要素にない機能を持ちうる）のであれば、「～やる」が「に」格名詞句を取っているとは言えなくなる。「～やる」もそれに先行する動詞もひとつひとつは「に」を取れなくても、両者の意味が合体して全体としては「に」が取れる（あるいは先行する主動詞が「～やる」に補強されて「に」が取れる）と言えるからである。合体したときに「に」が取れるかどうかは、主動詞の意味に依存しており、「(お菓子を) 焼く」、「選ぶ」、「買う」、「読む」、「作る」、「取る」などは、以下の例が示すように、「～やる」と一緒になると「に」格を取ることができる。¹⁰

(23) a. 次郎に本を読んでやった。

b. *次郎に本を読んだ。

(24) a. 次郎に紙飛行機を作ってやった。

b. *次郎に紙飛行機を作った。

(25) a. 次郎に辞書を取ってやった。

b. *次郎に辞書を取った。

他方、同じ他動詞でも、「持つ」、「洗う」、「ほめる」、「入れる」、「殴る」などは、(26)～(30)が示すように、「～やる」がついても「に」格が取れない。

(26) *次郎に本を持ってやった。

(27) *次郎に車を洗ってやった。

(28) *次郎に家をほめてやった。

(29) *次郎に犬を入れてやった。

(30) *次郎に太郎を殴ってやった。

「～やる」と複合して「に」名詞句を取れる他動詞は、いずれも「～やる」と複合した時に全体として(3)の意味構造を持ちうるものである。¹¹ (3)に(4)の意味構造がかぶさり再語彙化されるのである。だめな例はいずれもそのような意味構造を持ってない例である。「次郎にケーキを焼いてやる」はいいが、「次郎に草を焼いてやる」がおかしいのも、後者では、(3)の関係、つまり「次郎」が「草」を手に入れるという読みができないからであ

る。この例は単に複合動詞を見ただけでは、間接目的語が取れるかどうかは決められないことを示している。

以上の考察から、本稿では、(21)のような例も「～やる」がゴール項を取っている証拠にはならないと考える。柴谷で「～やる」のゴール項が文中に現れるとされているのは、(21)のような場合だけであって、あとは全部おもてに現れることはないのである。以下本稿では、「～やる」が(4)のような意味構造と項構造を持つという立場に立つて話を進める。この立場に立つと、(31)～(34)の文の複合動詞は、それぞれの文の右側に示したような項構造を持つことになる。埋め込まれている項構造はイヴェント項の中身を表し、二つの ag は融合される。

(31) 市役所に行ってやった。‘行ってやる<ag <ag go>>’

(32) 爪を切ってやった。‘切ってやる<ag <ag pt>>’

(33) 車に荷物をのせてやった。‘のせてやる<ag <ag go th>>’

(34) 次郎にリンゴを送ってやった。‘送ってやる<ag<ag rec th>>’

問題が出てくるのは、(21)のように、複合の結果、項がひとつ増えるものをどう表示するかである。(34)のように主動詞がすでに rec を持っている場合は問題はない。私は(35)を(21)に対する項構造として提案したい(「買う」を代表例として示す)。

(35) ‘買ってやる<ag <ag th>>rec’

括弧の外側に rec をおいたのは、それがどちらの述語の項でもなく、述語全体の項であることを表している。これは、語彙機能文法では、項をなさないが文全体としては必要とされる文法機能を、(36)のように括弧の外側に示すのにならったものである。¹² なお、rec は外側の項構造と内側の項構造が融合する時に括弧の中に繰り込まれ、項の序列に従って ag の次に置かれるので、最終的には <ag rec th> のようになる。

(36) ‘BELIEVE<SUBJ XCOMP>OBJ’

柴谷は、本稿の取った立場と違って、文法化された「～やる」が依然として ag, go, th を取る3項述語としている。但し th が個物ではなくて

イベントを表す点では山本と同じであり、柴谷と山本の違いは結局ゴール項が存在するか否かに集約される。

柴谷では、「～やる」構文に対して、大ざっぱにいうと、ゴールがシームを HAVE するという GIVE-schema にのった解釈規則が作動するが、この解釈規則の特色は、「～やる」のゴールが表出されていれば規則が強制的に適用し、表出されてなければ随意的に働くという点である。もし働けば、「～やる」のゴールは主動詞のシーム（個物）と関連づけられ、もし作動しなかったら、「～やる」のゴールは「～やる」のシーム（出来事）と関連づけられることになる。この解釈規則の特異な点は異なる述語のゴールとシームを結びつけるという点である。これは「～やる」にゴール項を設定したことから生ずる必然的結果である。以下、主動詞の種類に分けて柴谷説と山本説を対照していくことにする。

3. 柴谷説との対比

3.1. 主動詞が自動詞の場合

柴谷では、(37)の「妻に」が「～やる」のゴール項であるとすると、その「妻」が受け取るようなシーム項が主動詞「死ぬ」の項として存在しない、つまりHAVE関係が成立しないので解釈ができない、従ってアウトとされている。この分析はすでに指摘したように、解釈のさいに、「～やる」のゴール項と主動詞のシーム項を結びつけることが前提になっている。

(37) *太郎は妻に死んでやった。

さらに柴谷では、「～やる」のゴール項は表出されない場合もあるのであるから、(37)についても、「妻に」を「～やる」のゴール項としない選択も可能なはずである。そちらの選択に従うと、「～やる」のゴール項が表出されてないことになるので、解釈規則が随意的に働くことになる。もし解釈規則が適用されると、主動詞「死ぬ」がシーム項をもたないので、「～やる」のゴールとの間にHAVE関係が成立せずアウトということになる。他方、もし解釈規則が適用されないと、「～やる」のシームである「*太郎が妻に死ぬ」という出来事が、「～やる」の表出されてないゴール

と関連づけられる (HAVE関係に入る) ことになる。しかし「*太郎が妻に死ぬ」自体が余計な項を持つアウトな文であるので、こちらもアウトになる。柴谷ではこのように(37)をアウトにするのに三つのルートが存在する。山本説では、「～やる」はゴール項をもたないのであるから、上例は主動詞「死ぬ」の取れない余計な項があって (語彙機能文法で言えば一貫性 (Coherence) の条件に違反して) アウトになるだけのことであり、解釈規則は必要ない。柴谷の解釈規則はゴール項を設定したために必要となった交通整理のための規則であると言えよう。

次に(38)のような、間接目的語を持っていない場合はどうなるであろうか。

(38) 太郎に頼まれて銀行へ行ってやった。

(38)では、「～やる」のゴールと考えられるものが主節には存在しないので、解釈規則は随意的に適用されることになる。もし適用されると、「～やる」のゴールと関連づけられるシーム項が主動詞の項構造の中には存在しないので、解釈が成立しない。もし、解釈規則が適用されなかったら、「～やる」のゴールが、「～やる」の項構造にあるシーム (出来事) と関連づけられるので、こちらの場合は解釈が成立し、受け入れられる文となる。山本説では、「行ってやる」が余分な項もとっていないし、また必要な項も欠いていないので、文法的な文ということになる。¹³「～やる」が出来事を項としてとっているという点では柴谷説と同じであるが、山本説では「～やる」にゴール項は存在せず、誰が恩恵を受けるかは、(4)における[Z]のRによって示される。柴谷では、「～やる」がゴール項を持ち、誰が恩恵を受けるかは、ゴール項のRによって示される (但しRは文中に現れるとは限らないとしている)。

3.2. 主動詞が他動詞の場合

3.2.1. 主動詞の取りうる目的語がひとつの場合

まず、柴谷のいう「～やる」のゴール項が表出されている場合を見てみることにする。(39)のような例がこれである。

(39) おじいさんは太郎に船を作ってやった。

柴谷では(39)の「太郎に」は、主動詞「作る」のゴールではなく（「作る」は「買う」と同じように間接目的語を取らない）、「～やる」のゴールになる。従って解釈規則が強制的に適用され、「作る」のシーム項である「船」が「～やる」のゴール項である「太郎」と関連づけられ、解釈が成立する。柴谷では、(39)と次の(40)の「太郎」とでは、同じゴールでも前者は補助動詞の、後者は主動詞の項という違いが出てくるが、実際にそれに対応するような意味上の違いを感ずるだろうか。

(40) おじいさんは太郎に手紙を書いた。

山本説では、(39)の「太郎に」は「作る」が「～やる」と複合した結果取れるようになった間接目的語であって、「作ってやる」と「書く」が同列に並び、(3)の意味構造を持つことになる。次に、柴谷のいう「～やる」のゴール項が表出されていない場合を見てみることにする。次の(41)のような例がこれである。

(41) (太郎に頼まれたので) 花子はりんごを買ってやった。

a. 花子が太郎にりんごを買ってやった場合

b. 花子が太郎以外の人にりんごを買ってやった場合

柴谷は(41)には(41a)と(41b)のような二つの意味があるとして、次のように説明している。(41)では「～やる」のゴール項が表出されていないので、解釈規則は随意的に働く。もし適用されると、「～やる」のゴール項（ここではそのRは「太郎」）が「買う」のシーム項の「りんご」と関連づけられ、(41a)の意味になるという。しかしこれはゴール項のRを「太郎」に固定することが前提になっているように思う。Rが「太郎」以外の人である可能性もあるのではないだろうか。もしそうなら、(41b)の意味も同時に得られることになる。次に、解釈規則がもし適用されないと、「買う」のシーム項の「りんご」は「～やる」のゴール項と結びつけられることができなく自由なので、「～やる」のゴール項とは別の人と関連づけられ（つまりHAVE関係に入り）、(41b)の意味になるという。しかし、シーム項（「りんご」）の相手を自由に選べるのであったら、理論上誰でもいいはず

であり、その中に太郎も含まれているはずである。従って、もしシーム項の相手として太郎を選んだならば、結果として(41a)と同じ意味になってしまう。つまり、解釈規則が適用された場合と同じになってしまう。柴谷の解釈規則は余剰的に働くのである。解釈規則の余剰性はセクション3.1のところすでに触れた通りである。なお、柴谷では解釈規則が適用された場合は、シームの「りんご」が「～やる」のゴールを表す人と結びつくので、さらに別の人と結びつくことはないとして、シームが二つのゴールと関連づけられることを禁止する制約（柴谷の(44)）を設定している。議論を元に戻すと、(41)の二つの解釈は山本では次のように説明される。すなわち、(41)は「買ってやる」の rec を表すものが表出されていない例であって、りんごを誰が受け取るかは、従って誰が恩恵を受けるかは文脈から補われることになる。従って、(41)は(41a)の意味にも(41b)の意味にもなりうる。特別な解釈規則は必要としない。

ところで、上例は、間接目的語の「に」格名詞句を取れる例であるが、次の(42)、(43)は間接目的語を取ることのできない例である。

(42) 庭を掃除してやった。

(43) 太郎を5時に起こしてやった。

柴谷に従えば、上例では「～やる」のゴール項が表出されていないので、解釈規則は随意的に働く。もし適用されると、主動詞のシーム項と結びつけられなければならないが、上例の「を」格名詞句はどちらも「～やる」のゴールが受け取るようなシームではない。従って解釈規則が阻止されるので、こちらの可能性は存在しない。他方、解釈規則が適用されない場合は、「～やる」のゴール項は「～やる」のシーム項（(42)で言えば「庭を掃除する」という出来事）と結びつけられることになるので、解釈が成立する。ゴール項は表出されていないので、未指定となり、文脈から補われる。山本説では「～やる」にゴール項がないのであるから、柴谷説における解釈規則が適用される場合のような、つまり「～やる」のゴールと主動詞のシームとを結び付けるようなことはもともと存在しない。山本説では、柴谷説の解釈規則が適用されなかった場合の方しか存在しない。但し、山本説で

は、主動詞の示す行為を誰のためにやったかを示すスロットは項構造ではなくて意味構造(4)の方にある。

3.2.2. 主動詞が二重目的語をとる場合

まず(44)のような、主動詞のゴールと「～やる」のゴールの両方が表出されている場合から見てみることにする。

(44) *太郎が次郎にそのことを花子に話してやった。

柴谷では、「～やる」がゴールを持つため、このような可能性が存在するが、山本では「～やる」がゴールをもたないので、もともとゴールは一つ(主動詞のゴール)しか許されない。もし(44)のような文が現れれば、それは「話してやる」が項としてとらない余計な文法機能を持っていてアウトだけである(Coherenceの条件違反)。柴谷では、(44)は「～やる」のゴールが表出されているので(二つの「に」格名詞句のうちのどちらにしる)、解釈規則が働き、シーム項「そのこと」と結びつけられる。そうすると、もう一つの「に」格名詞句も主動詞「話す」のゴール項として同じシーム項「そのこと」と結びつけられねばならない(さもないと結びつくシームがなくなり解釈が成立しない)。そこで、柴谷は、一つのシームを二つ以上のゴールと結びつけることはできないという先ほどの制約を提案し、その制約に違反してアウトとしている。このような制約も、「～やる」にゴールを認めたために必要になった制約である。

次に、(45)のような、ゴール項が一つだけ表出されている例を見てみよう。

(45) 太郎が花子にそのことを話してやった。(柴谷の(13))

まず、(45)の「花子に」を「～やる」のゴールと考えると、柴谷では解釈規則が適用されることになる。そうすると、「そのこと」が「話す」のゴール項(表出されてない)と「～やる」のゴール項の両方に結びつけられるので、先程述べた、一つのシームを二つ以上のゴールと結びつけることはできないという制約に違反してアウトになる。山本では「～やる」はゴール項をもたないのであるから、「花子に」が「～やる」のゴール項である

という仮定そのものが存在しない。従ってそのような読みも存在しない。次に(45)の「花子に」が主動詞「話す」のゴールと考えるとする。そうするとこれは「～やる」のゴールが表出されていない場合であるから、柴谷の解釈規則が随意的に働く。もし適用されると、シームの「そのことを」は「～やる」のゴールと結びつく。しかし「話す」のゴールも表出されていないが存在するので、それとも結びつき、結局二つのゴールと結びつけられることになるので、先ほどの制約に違反してアウトになる。もし解釈規則が適用されないと、「そのことを」は「話す」のゴール「花子に」と結びつけられるだけなので、これは解釈可能な文法的な文となる。「～やる」のゴールの方は表出されず未指定となる。山本では、「花子に」は「話す」のゴールでしかあり得ないので、従って「そのこと」は「花子に」と結びつけられることになるので、柴谷の解釈規則が適用されない場合と同じになる。またそのような読みしか存在しない。誰のためにそのことを花子に話すかは、換言すれば(4)の[Y]が誰になるかは、文脈で決まってくる。山本では柴谷に見られるような特別の制約は必要ない。

4. 目的語尊敬形とゴール

柴谷が「～やる」にゴール項を設定する根拠の一つは、次の様な例にみられる目的語尊敬形の対立である（柴谷の(16)）。

(46) *ぼくは先生に新聞をお買いしてさしあげた。

(47) ぼくは先生にそのことをお話してさしあげた。

一般にゴール項は目的語尊敬形を引き起こすことができる。従って(46)がアウトなのは、「先生に」が「買う」のゴール項ではないのに「買う」を目的語尊敬形にしたからであり、これに対して(47)がおかしくない文なのは、「話す」がゴール項を取ることができ、「お話して」はそれに呼応して尊敬形になっていると言える。つまり(46)の「先生に」は、「さしあげる」の方のゴール項と考えなければ説明がつかないと言う。たしかに「お買いする」、「お立ちする」が変で、「お話しする」、「お贈りする」が変でないのは、ゴール項を取るか否かに依存している。柴谷は、(46)で「先生に」

が「買う」のゴールでないことを、それが「さしあげる」の項である証拠としているが、それはそうではない。「買ってあげる」、「買ってさしあげる」、「買ってやる」などは複合動詞全体としてゴール項を取れる意味構造(3)を持っているのであって、「先生に」を「(～して) さしあげる」のゴール項と考える必要はないのである。「先生に」は(3)の意味構造の[Y]を表しているのであり、この[Y] (項構造には rec として現れる) が尊敬形を引き起こすのである。「ぼくは先生に新聞を買ってさしあげた。」がおかしくないのに(46)が変なのは、柴谷の言うように複合動詞の中の「買う」を、尊敬形を引き起こすゴール項を取れないのに尊敬形にしたためである。

それでは次のような自動詞構文における目的語尊敬形はどのように説明できるだろうか。これも「～やる」がゴール項を取る証拠としてあげられている。

(48) 先生に頼まれたので、市場へ行ってさしあげた。(柴谷の(30a'))
 「～やる」にゴールを設定すれば、(48)の尊敬形「～さしあげる」はそれに呼応して使われたということができ、ゴールは尊敬形を引き起こすという一般論に即して説明できる。なお、このゴールを表す要素がどこにあるかという指示のレベルになると、以下の例が示すように簡単にはいかない。

(49) 先生に言われて、銀行へ行ってさしあげた。

(50) 先生の荷物が重そうだったので、ひとつ持ってさしあげた。

(51) 「あなた達先生に何かしてあげたの?」「銀行へ行ってさしあげました。」

(52) a. 太郎に頼まれたので、先生にリンゴを送ってさしあげた。

b. *先生に頼まれたので、太郎にリンゴを送ってさしあげた。

(49)で、誰のために銀行へ行ったかと言えば、つまり柴谷の言うゴール項のRがどこにあるかと言えば、文中に現れてない誰か重要人物であろう。「先生」である可能性もある。(50)ではRは従属節の中の所有格名詞「先生(の)」であり、(51)では別の文の中にある。(52)は、動詞と同じ節の中にゴール項が表出されていると、Rは通常それを越えられないことを示している。柴谷は、「～やる」にゴール項を設定したため、項レベルと尊敬形

の関係は簡単におさまっているが、「～やる」のゴール項とRの関係は複雑なままである。「～やる」にゴール項を設定すると確かに指示レベルの複雑さを項レベルで一本化する受け皿として働くという利点はある。しかし一方では、これまで見てきたように、「～やる」構文の解釈自体がそのために複雑になるという結果を招いている。話を元に戻すと、(48)は山本では次のように説明される。(48)の複合動詞「行ってさしあげる」は、(4)の意味構造を持ち、「～さしあげる」は「～やる」と同じようにゴール項を喪失している。(48)の尊敬形「さしあげる」は、(3)の[Y]に対応する(4)の[Y]によって引き起こされたと考える。(4)の[Y]は、特定の格や文法機能に写像されることがないので、それを受けるRが、上例のようにいろいろな所に出てきても当然であると言える。

柴谷は次の(53)のような文について注4で、目的語尊敬形を引き起こすのは「～さしあげる」の方のゴールであるが、通常「話す」のゴールと「～さしあげる」のゴールが同じとする解釈を受けるので、表出される主動詞の方のゴールが目的語尊敬形を引き起こしているように見える、しかし理論上はふたつのゴールは異なりうる、と述べ、(54)のような例をあげている。

(53) ぼくは先生にそのことを話してさしあげた。(=柴谷の(15b))

(54) 太郎がそのことを先生にお話ししてくれと言うので、ぼくは仕方なしにお話してやった。

(54)の「お話ししてやった」は、「話す」のゴールは「先生」で「～やる」のゴールは「太郎」であることが意図されており、両ゴールが異なる例であるが、私には、「お話ししてやる」のような言い方は全く受け入れられないので、(54)はアウトである。私には、主動詞のゴールになる人がシームを受け取って恩恵を得るのであって、それとは違う人が恩恵を得るような(柴谷で言えば「～やる」のゴールが「話す」のゴールとは違う人を指すような)読みは私にはない。私の分析ではもともと「～やる」にゴール項は存在しない。これに対しては次のような反論があるかもしれない。

(55) 太郎に頼まれたので、次郎にリンゴを送ってやった。

(55)で、次郎にリンゴを送るという行為は太郎のためにやったのであるから、「～やる」のゴールは太郎を指す（柴谷説に従って「～やる」がゴールをもつと考えた場合であるが）、つまり、「送る」のゴール「次郎」と「～やる」のゴールは異なる人を指しうるといふ分析である。しかし、「太郎」のためにやったのは、「次郎にリンゴを送ってやる」という主節全体のイベントである（「～やる」も含まれていることに注意のこと）。主節の中だけで見れば、恩恵を受けているのは「次郎」であって「太郎」ではない。これは、(56)、(57)のような例からも明らかである。

(56) 先生に頼まれたので、次郎にリンゴを送ってやった。

(57) *先生に頼まれたので、次郎にリンゴを送ってさしあげた。

「送ってやる」ならよくて「送ってさしあげる」にすると文が変になるのは、それらが主節の「次郎」(rec 項)と呼応するからであって、それを越えた従属節にある「先生」や文中以外の人と呼応しているのではないからである。

5. 「(～して) やる」・「(～して) くれる」の対立とゴール

柴谷は、「～やる」にゴール項を設定しないと、「～やる」と「～くれる」の差が説明できないとしている。次の例は柴谷からの例（柴谷の(23),(24)）である。

(58) a. 僕は花子に本を買ってやった/*くれた。

b. 花子は僕に本を買って*やった/くれた。

(59) a. 花子に頼まれたので、僕は市場へ行ってやった/*くれた。

b. 僕が頼んだので、花子は市場へ行って*やった/くれた。

「～やる」は誰かが話者以外の誰かのために何かをすることであり、「～くれる」は誰かが話者のために何かをすることである。確かに柴谷のいうゴール項を設定しておけば、そのゴール項が誰を指すかによって、両者の区別をすることができる。しかし、両者の区別は、ゴール項を設定しなくても、意味構造に言及することによって行うことができる。「～やる」の意味構造(4)と、(60)に示した「～くれる」の意味構造を比較していただ

きたい。両者を見れば、「～くれる」が、(4)の意味構造の[Y]がスピーカーに限定された場合の表現であることが分かる。

(60) X CAUSE Z FOR Y(=SPEAKER)



6. 結論

以上本稿では、文法化された「～やる」はゴール（山本のリシピアント）項を喪失しており、柴谷の設定したゴール項が行う仕事は、意味構造の中の対応する部分が担っていること、「～やる」は先行する動詞と複合した結果、複合動詞全体として再度本動詞としての「やる」と同じ意味構造を獲得し、リシピアント項を取る場合があること、以上のように考えれば柴谷の提示しているような複雑な解釈規則は必要がないことを論じた。

注

- (1)の「送ってやる」が、「買って食べる」、「書いて送る」などと異なり複合動詞としての統一性を持つことは、「買ってすぐ食べる」、「書いてすぐ送る」とは言えても、「*送ってすぐやる」とは言えないことから明らかである。なお、「買いに行く」、「持って行く」などが項構造、機能構造では1語、構成素構造では2語として振舞うことについては、Matsumoto(1996)第9章を参照のこと。
- 以下 ag=agent rec=recipient th=theme go=goal とする。
- (4)のイヴェント項の内容を具体的に示したもの。
- 日本語における、項構造からSUBJ, OBJ, OBJ2 など文法機能への写像については、まだ未解決の問題が多いし、また本論とは直接関係がないので、ここでは省略した。なお本稿は語彙機能文法の枠組みで書かれている。
- 日本語では英語の二重目的語構文のような明確な構文上の特徴がない。「に・を」構文には、英語では二重目的語構文にはならない、「火に油を注ぐ」、「窓にガラスを入れる」、「壁にペンキを塗る」のような多数の例があり、どこで二重目的語構文との線を引くか検討を要する。「に」項が sentient である場合、というように単純にはいかない。それでどれだけの有用な一般化が得られるかが問題である。以下、「に」名詞句に間接目的語という呼称を使っているが、暫定的に使用したものである。
- 以下、POSS=POSSESSIVE OBL=OBLIQUE

7. 格や文法機能への写像が行われなくても、Rを文脈から得ることは可能である。
8. 「～やる」と複合する動詞自体がリシピアント項を取る動詞であれば、当然全体としてもリシピアント項を取ることになる。
9. 複合語全体としては(3)の「やる」と同じくリシピアント項を取る。
10. 「買う」の例はすでに示した通りである。
11. 「読んでやる」では本の内容が相手に行く、いわゆる〈導管メタファー〉である。
12. (36)は、He believes Tom to be a teacher. の believe が持つ下位範疇化枠である。
13. 語彙機能文法で言えば、機能構造に課せられる Coherence と Completeness の条件に違反していないということ。

参考文献

- Dowty, David. 1991. Thematic Proto-Roles and Argument Selection. *Language* 67: 547-619.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hunnemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lord, Carol. 1993. *Historical Change in Serial Verb Constructions*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Matsumoto, Yo. *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Newman, John. 1996. *Give: A Cognitive Linguistic Study*. The Hague/Paris: Mouton.
- Ohara, Masako. 1997. The Interface between Syntax and Lexical-Semantics: An Analysis of Benefactive Constructions in Japanese. *Essex Graduate Student Papers in Language and Linguistics Vol. 1*. University of Essex.
- Shibatani, Masayoshi. 1994. Benefactive Constructions: A Japanese-Korean Comparative Perspective. In Akatsuka, Noriko (ed.), *Japanese/Korean Linguistics Vol. 4*. Stanford: CSLI Publications.
- You, Seok-Hoon. 1997. Argument Structure Changes in the Korean Benefactive Construction. In Sohn, Ho-min and John Haig (eds.), *Japanese/Korean Linguistics Vol. 6*. Stanford: CSLI Publications.